

目的 家庭科教育の特異性とされることは体験的学習ということであるが、現実の調理実習において個々の生徒がどれくらい教材を通して学習効果をあげているか、その学習状態については明らかでない場合が多い。そこで調理実習を通して体験的学習のもつ意義とあり方について学習者の実態を把握し、如何なる配慮がなされると、学習経験を通して思考・能力及び技術が定着するのか、その過程を知ろうとするものである。

方法 高等学校「家庭一般」における調理実習教材について (1) 目的に達するまでの一つ一つの過程で、思考・能力と技術との組み合わせ方をみるために評価表の作成をした。(2) 評価に当っては作業単位ごとに評価基準を設けて生徒に自己評価させた。さらに(3) 「食物」の履修者を対象にして同一の評価表によって検討した。

結果 (1) 調理実習中の各教材における作業参加は平均28%であるが、個々の生徒の分担する作業は質的にも量的にも差があることがみられる。(2) 単位作業要素(技術)ごとには作業した者にはその過程において思考が伴っているが、出来ばえと思考とは一致していない。(3) 単位作業要素(技術)に対する自己評価は高いが、各自の思考にはそれと同じ傾向はみられない。(4) 調理実習中での単位作業学習の数の多い者の方に実践への容易さがみられる。(5) 経験が積まれていくうちに、単位作業に対する思考と自己評価との開きは縮小してくる。